

---

# 職場多様性

穂波後生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

職場多様性

### 【Nコード】

N3244Y

### 【作者名】

穂波後生

### 【あらすじ】

この春、憧れの職場に就職した田波春子は、新天地にて少し緊張気味であった。慣れない環境ということもあるが、ただそれ以上にどうしても解せないことあるのが原因だった。どうして私なんかが採用されたのか。

そう、そこには、意図せずに隠された事情が隠されていたのであったのである。

「今日から、こちらの設計部でお世話になります田波春子と申します。右も左もまだ分からない社会人一年目でありますので、諸先輩方にはご迷惑おかけすることもあるかと思いますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします」

と、この一か月の間、悩み悩んで考え続けてきた言葉を、一気に言い終わった私は大きく勢いよくお辞儀した。

額と手には変な汗が出てきているし、喉はカラカラ。目の前に居並ぶ十数人ほどの上司や先輩たちの顔も、ぜんぜん頭に入っていない。一応幸いにも噛まないで最後まで言えたけど、声がうわずっていたのが自分でもわかった。お辞儀をしたのはいいけど、顔を上げるのが怖い。

私って人の前に出ると、どうしてこんなにも緊張しちゃうのだろう。こんなので社会人として、ちゃんとやっていけるのかな。

うつん、心配なのは、それだけじゃない。もっと根源的な問題が私にはあるのだ。

だから、どうしてもこう思ってしまう。

そもそも私は、本当にここで働いていいの？

この春、××大学の建築学科を卒業した私は、建築設計では業界最大手の設計に就職し、ずっと憧れだったこの意匠設計部に入ることができたのだ。

設計の意匠設計部と言えば、その実力は国内、国外問わず評価が高いことで知られている。ほとんどの人が知るランドマーク的な建物のうち、かなりのものがここで設計されていて、デートスポットとしても有名で、展望フロアのカフェから見る夜景がきれいなビルや、数々の大規模なイベントを行っている某大型展示会場は、ここの設計で建てられている。そのほかにも、名前が知られている

美術館や博物館、大学校舎、そして病院、上げていけば切がないほどだ。

そんな建築界のエリート集団に、今日からこんな私が一員になったのである。自然に背筋が伸びる思いだったし、これからの先行きが不安で仕方がなかった。

正直に言っと、私がここに入れるとは思ってもいなかったのだ。

それは私だって大学で建築学科を選んだくらいだから、地図に載るような建物を自分の手で設計したいという思いはあったし、幼いころから物を作ることが好きだったからこそ、こんな建設不況の最中にも関わらず、建築を勉強しようと思ったのだ。

だから大学では一所懸命勉強してきたし、デザインや建築史だけでなく、どうしても興味がわかなかった構造力学も、頑張つて最高評価を貰った。努力の甲斐もあって、成績は学科内でも、そこそこのトップレベルをキープしていた。

だけど製図の単位だけは、最後まで最低評価だったのだ。

製図とは、実際に建物を建てる時のように諸条件を提示された課題を、自ら構想した建物を作図し提出するカリキュラムだ。当然、その提出物の良し悪しで評価される。建築学科では最も中心になる科目なので、これを落としてしまうとのおのずと留年してしまうことになるものなのだ。

少し考えてみれば当然のことで、建物を作ることができる人が建築士ならば、それを養成する建築学科には、必然的に必須の授業と言つていい。特に意匠設計などデザイン方面に進みたい学生には、この科目での高評価は必至だと言つてよかった。

でも私はそんな肝心の製図が、ずっと最低評価だったのだ。なんとかぎりぎり留年はまのがれてきたけど、ほとんど毎回冷や汗ものだった。

理由は分かっている。私には想像力が微塵も無いのだ。どんな建物も、同じような形になってしまうのだ。オフィスビルもマンションも美術館も図書館も教会も、ゼーんぶ同じ形。おかげで製図の授

業を受け持っていた先生には、同じ図面を使いまわしているのではないかと疑われるし、同じ学科だった友達には、「全然違う分野の建物を同じような形にしちゃうなんて、ある意味才能だね」などと、嫌味を言われる始末だ。

そんな私だから、大学の四年生になるころには、意匠設計などというクリエイティブな方面を早々に諦めた。女手一つで育ててくれて私の幼いころからの希望を叶えるため、大学まで出してくれたお母さんに親孝行してあげるのもいいのかもしれないと思い、地元の会社を中心に就職活動していた。

ところが、ほとんど求人が無いのだ。特に地方の建設業界の求人状態は酷いものだった。

こいうのも烏滸がましいが、私の大学はそこそのネームバリューがあるところだけれど、それでも激しい競争に晒された。本質的に男社会である建築業界は、女であるということだけでマイナスに影響してしまう。同じ学科で私より成績が悪い男の子は内定を貰えたのに、私は落とされたのなんて話は、就職活動中ざらだった。それでも多少才能が必要な意匠系やデザイン系なら納得もいくのだけれど、そんなのとは関係ない、どう考えても女だから理由で落とされたときには、就職しようなどという意欲さえ失せそうになったぐらいだった。

そんな中で 設計の入社試験を受けようと思ったのだった、物は試しという感じだった。採用されればいいとは淡く思っていたけど、まさか本当に採用されるとは思ってもいなかった。

それが、そんな私が、 設計に採用されたのだ。

最初は天にも昇るような気持だった。純粹に努力は報われるものなんだなどと思ったりもした。田舎に帰れなくなってお母さんには悪いなと思ったけど、でも少ないチャンスをつかんだ私をお母さんは応援してくれた。そんな気持ちが心強くもあり、うれしかった。

だけど、いざ入社日が近づいてくると、だんだんと言ひ知れぬ不安が沸き起こってきたのだ。

本当に私でいいのだろうか。ろくに設計もできない私が意匠設計部に入っても、ただのお荷物になるのではないか。お荷物ぐらいならまだしも、何か大きなミスを犯しては、それこそ目も当てられない。

そんな根拠のない不安抱えながら、私は残りの大学生活を過ごした。こんなにも不安になるぐらいなら、『ぜええんぶウソでした』なんて言われたほうが、よっぽどすっきりするとさえ思うこともしばしばだった。

でも結局、『ドッキリ』と書かれた看板を持つ、赤いヘルメットを被ったおっさんも現れることもなく、4月が来ると私は入社式と新人研修と、大学生活では考えられないような忙しい日々を過ごすことになった。

そして新人研修を終えた私は、今こうしてここにいるというわけだ。

「固いなあ、田波さんは。もう同じ部署で働く仲間なんだから、もっとリラックスしなくちゃあな」

少し渋めの男性の声が聞こえた。見るとナイスミドルといった感じの清潔そうな身なりをした男性が、苦笑うように頬を歪めて私を見ている姿があった。この意匠設計部を実施的に管理している松井課長だ。

「はい、すいません」

と何度もお辞儀を繰り返しながら返事した私は、声色が硬いのが自分でもわかった。

「だから、それが固いんだって」

松井課長は、さらに頬を歪める。

「あわわわ。すいません。すいません」

なんで、こんなにも米つきバツタみたくお辞儀をしちゃうのか自分でもわからないが、どうしても止められなかった。おかげで眼鏡もずれてしまった。そんな私を見たからなのか、失笑が漏れている

のが聞こえる。眼鏡を直し、恐る恐る見ると、課長と私を囲むように立っている先輩たちが、笑いを堪えるようにしていた。

もう、嫌だ。穴があったら入りたい心境。恥ずかしさで、ますます顔が熱くなっていく。

「まあ、初日だから仕方がないな」

と松井課長は、私を慰めるように言う。そして懐かしそうな微笑みを浮かべて続けた。

「何事も初めては緊張すると思うけど、田波さんには、早くここに慣れてもらわないとな。私はおおいに期待しているんだから」

私は少し涙が出そうになってしまった。あまりにも情けない醜態を、こんな大勢の前に晒していたせいもあるかもしれないが、こんな渋い声で優しく語りかけられてしまうと、胸の奥の柔らかい部分がきゅっとなってしまう。

でも、期待しているなんて言葉は、少し心苦しい。期待に添える自信がまったくない私としては、別に悪いことしたわけではないのに、申し訳ない気分になってしまうのだ。

「そうは言っても、いろいろ分からないこともあるだろうから、しばらくは野崎さんに聞てもらえばいいから。野崎さん、頼むよ」

「はい」

と短い返事する女の人の声が聞こえた。見ると、肩甲骨のあたりまであるストレートの髪を後ろに束ねた女の人が、私に向かって笑顔で手を振っている。年は二十代後半といったところだと思うけど、肌は白く張りがあって若々しい感じ。グレーのスーツ姿はすらっとして一見してシャープな印象を与えていて、頭の回転が速く、仕事ができそうな雰囲気を感じさせていた。

きれいな人だな、と私は一目見て思った。眼鏡をかけて幼児体型な私とは、全然比べ物にならない。こういう人を見ると、同じ女なのになんてこうも違うのだろうと思ってしまう。

「そのほかに連絡事項ある者いるか？」

松井課長の声が聞こえた。周りを見渡すように眺める。先輩たち

も、特に何もないのか返事はなかった。でも、なんだろう。なんとなく違和感がある。

特に返事のないのを認めると課長は頷いてから、朝礼の終了告げた。

と同時に先輩たちは、各々席に戻り、さっそく自らの仕事に取り掛かり始める。

一転して、この場の空気が変わったような気がした。

朝礼では和やかな雰囲気だったのが、ピリピリとした硬質な空気に包まれていく。電話を取り、真剣な表情で何事が説明している人もいれば、昨日プレゼンはどうだったとかこうだったとか議論始める人もいる。図面を手に取りペンを片手に持って、CADオペレーターが作ったと思われる図面を、眉を歪ませてチェックする姿、パソコンに向かい何かの書類を作っている人もいた。新人の私には、何をやっているのかほとんど分からないが、それでも先輩たちのそんな姿を見ているだけで、自分が何をしたいのか分からないにもかかわらず、何かしなければいけないという焦りみたいな感情でひりひりとした。

でも、と思う。

ここの人たちを見渡し見ると、心なしか怪我をしている人が多いような気がした。先ほどなんとなく感じた違和感はこれだ。腕に包帯を巻いて吊っている人や、松葉杖を机に立てかけている人、頭に包帯を巻いている人までいた。ざっと見た感じでは、五、六人と言ったところだけど、ここにいる人の比率から行くと、三分の一ほど。何か事故にでもあったのだろうか。

「よろしくね、田波さん」

先ほど紹介された野崎さんが柔和な笑顔を見せながら、私の前に立っていた。ちょっとした挨拶にも、なんだか洗練された都会的な雰囲気漂っている。

私は慌てるようにして、頭を下げた。

「あ、はい。こちらこそよろしくお願ひします」



「そんなに固くならないで。それよりも、田波さんって、××大学の出身でしょ。実はね、私もその卒業生なの。上田教授の研究室にいたんだよ」

「えええつ、そうなんですか。私も上田研です」

この二週間ほど知り合いがいない環境にいたので、同じ大学の出身者がこの会社にいたことがとてもうれしい。しかも同じ研究室。なんだか急に大学生活が思い出され、ものすごく懐かしい気分になった。つい一ヶ月前までは大学生だったのに、ものすごく遠い昔のような感じがする。

「ほんとに。じゃあ、あの汚い仮眠室まだある？」

「あります、あります。さすがに私は使わなかったけど、男の子は使ってた」

「そつかあ、まだあるんだあ、あれ。あそこダニがいっぱいいるんだよね。卒業制作の時使って、ダニにやられて大変だったなあ」

「ええつ、野崎さん、あそこに寝たことあるんですか？」

私がいた研究室には、仮眠室があった。仮眠室と言っても、部屋の一角に家具で区切りをしているだけで、そこにはいつから使っているかわからない汚い毛布があるだけのものだ。そんなところでも重宝するようで、卒業制作や卒業論文が佳境に差し掛かる追い込みで忙しくなるころ、大学に遅くまで残った同じ研究室の男の子の中には、そこで寝泊りする者もいたりしたのだ。

でも、いま目の前にいる野崎さんが、そこで寝たなんて信じられない。こんなにきれいな人が、あんな段ボールハウスみたいなところで寝ている姿が、どうしても思い描けない。それに、みんな仮眠室と呼んでいたけど、部屋みたいに完全な区切りがあるわけではないし、研究室内とはいえ不特定な人たちが出入りするのだ。そんなところに女の人寝るなんて、野崎さん怖くはなかったのだろうか。それとも野崎さんが在校していた時は、私が思い描いている汚い仮眠室ではなく、きれい感じだったのだろうか。うつん、野崎さんはダニがいると言っていた。ということは、そのころからあまり変わ

っていないのだろう。

そうすると野崎さんって、その理知的で大人な女性という外見とは裏腹に、結構ワイルドな人なのかもしれない。

「そうだよ。結構あそこにはお世話になったよ」というと野崎さん、何か思い出し様な表情を見せたあと、自称気味の笑みを浮かべる。「そういえば、あそこに『蟹工船』っていう看板があったですよ」

「ありました」

仮眠室には、ちょうど頭がくるところに、門のところにつける表札みたいな看板があつて、そこにはたしかに『蟹工船』と書かれていた。

「あれ、私が書いたんだよ」

何しているんですか、野崎さん。と思わず私は、突っ込みそうなたってしまった。けどと言われてみれば、確かにそんな雰囲気な場所ではあると思う。小林多喜二の小説『蟹工船』の中で、主人公たちが押し込められたあのノミだらけの船室は、なんとなくダニだらけだった上田研究室の仮眠室に重なるような気がした。

「でも、懐かしいなあ。もう六年前かあ、私があそこにいたの」

野崎さんは、中空に視線を上げながら、胸のところに手を当てた。昔のことを思い出しのか、嬉しそうな、それでいて寂しいような表情を見せる。その顔が社会人の厳しさを経験した大人の表情に見えて、そしてそれがとても綺麗なもので、私は思わず見とれてしまった。私の視線に気づいたのか、野崎さんは照れたようににはにかなかった。しばらくすると、少し怒ったような感じに口を窄める。

「もう、田波さん、今、私の年齢を計算したでしょ？」

「してないです、してないです」

私は慌てて首を振る。

「じゃ、なんで、私の顔をじっと見てたの？ 私のこと結構年いってるなあ、なんて思ってたんじゃないの」

「違います。私そんなこと思ってません。懐かしそうにしている

野崎さんが、なんだか綺麗で、見とれちゃっただけです」

と言ってから、私は「はっ」と口元を手に平で覆った。

何言っているんだ、私。こんなこと言ったら、そっちの趣味がある子だと誤解しかねないじゃない。

もう、そう思ってしまったと、途端恥ずかしくなり、まともに野崎さんの顔が見えなくなってしまった。頬が赤く火照ってくるのが、自分でも分かる。

すると野崎さんは、突然私の頭をその華奢な両手で包むと、自らの顔を寄せて頬摺りをしてきた。それがあまりにも突然のことで、私は私の胸が驚くほど高鳴るのを感じた。

「もう、田波さんはかわいいなあ。なんか、メキシコ・サラマンダーのアルビノ種みたい」

メ、メキシコなんだって?!

たしか野崎さんは、メキシコ・サラマンダーと言ったような気がしたけど、サラマンダーなんて爬虫類的な何かか思い浮かばないけど、なんだ、その生き物は。

野崎さんのこの様子からは、貶している感じはないと思うけど、でも、だからといって、褒められている気もしない。だって、サラマンダーだもの。日本語にすると、たしか火竜とか火トカゲとかなるのかな。あ、山椒魚という意味もあったけ。どっちにしても人を例えるには、あまり適切ではないような気がする。いくら私でも、さらには自分というフィルターを通していても、さすがにトカゲや山椒魚には似ていないと思う。

っていうか、思いたい!

「盛り上がっているところ申し訳ないけど、野崎さんに田波さん、ちよつといいか」

自分の席に戻っていた松井課長が、手招きしているのが見えた。私は怒られると思い、少し背中を窄める感じになってしまった。きつと私と野崎さんの会話が、煩かったのだらう。周りのみんな真剣に仕事しているというのに、私たちだけこんな無駄話をしていたの

だから、叱られても当然である。

でも、野崎さんは堂々としていた。悪びれた様子もない。私の頭への拘束を解いてと、小声で、「大学の話、またあとで聞かせてね」と囁く。そして軽い足取りで、課長の方へと歩みだした。私も慌てて野崎さんに続く。なんだかこうして野崎さんにくっついて歩くと、ヴァージンロードを歩く新婦とベールを持つ子供みたいだな、と思った。もちろん新婦は野崎さんで、子供は私だ。なんだかちょっと悲しい。

松井課長の前まで行くと、私の思っていたのと課長の様子が違った。叱られると思っていたが、そうではないようだ。朗らかな笑顔をみせると、私たちに向かってこういつてきた。

「田波さんには、これから意匠設計部の部長に挨拶をしてきてほしいんだ。野崎さん、田波さんを部長の部屋まで案内してもらえかな」

「わかりました」

と野崎さんも笑顔で返す。何だか二人とも、嬉しそうだ。作り笑顔というよりも、本当に嬉しそうなのだ。部長の部屋に行くのが、そんなに楽しいことなのか。

ということよりも、もつと気がかりだったのが、実はこの時点で、私は意匠設計部の部長に会っていない。普通部長などと言った重要なポストの人間は、入社式には顔を出すものだと思うのだけれど、意匠設計部の部長は見当たらなかった。忙しかったのか、それとも健康上の理由なのかは分からない。でも結局入社式で顔を合わせたのは、この部署では松井課長だけだった。

意匠設計部の部長って、どんな人なのだろう。

私は、新しい環境で緊張気味なのに関わらず、さらに緊張してくるのが自分でもわかった。部長というからには、それなりの恰幅の良い中高年の男の人を思い浮かべてしまっし、自分のお父さんぐらいの人を想像してしまう。怖い人じゃなければいいな。

しかしそんなオドオドとしている私に向かって、課長はあろうこ

とかさらに追い打ちをかけるようなことを言ってきた。

「田波さんは優秀みたいだから、部長付きの仕事を任せたいと思っ  
っているんだ」

ええっ？ ええええ！

すると、野崎さんの相槌打つ姿が見えた。

「課長、私も賛成です。田波さんはメキシコ・サラマンダーのアル  
ビノ種に似ているので、適任だと思います」

だから、メキシコ・サラマンダーって、なんなんだよお。

「田波さん、どうした？ 顔色が悪いぞ」

松井課長が心配そうに私を覗き込むようにしていた。

部長がどういう人なのか分からないけど、部長付になるというこ  
とはそれなりに重要なことを任されるということだと思う。新入社  
員で、まだ何も分からない私に勤まるとは、とても思えない。とい  
うか、そもそも自信がない。

「あのお、私なんかでいいんでしょうか？」

恐る恐る聞いてみる。できれば、部長付きなどという恐れ多いこ  
とは、避けて通りたい。

「何を言っているんだ。君の能力を買って、人事部長も推薦して  
きたんだ。あの人事部長のお墨付きを貰うぐらいなんだから、たい  
したものだと私は思っているんだよ。それなのに今からそんな弱気  
でどうする。もっと、奮起してもらわないと困るぞ」

私の自信なさげの態度が悪かったのか、逆にはっぱをかけられて  
しまった。

それにしても一度も会ったことがない人事部長という人に、私は  
ずいぶん買われているらしい。たしか面接のときとか、入社試験の  
ときとかにはいなかったような気がするのだけれど。それとも、そ  
うとは知らせずに面接官の中にいたのかな。でもそうだととしても、  
私のどこがそんなに気に入ったのか、不思議でならない。

「田波さんなら、大丈夫よ。きつとやれると思うわ」

応援してくれているのか、私に向かってガッツポーズを見せる野崎

さん。でも、根拠のないことを言うのは、やめてほしいと思う。

「じゃ、早速行つてきてくれるか」

と課長は言いながら、野崎さんに目配せした。私も自然と、野崎さんの方に視線を移す。でも、この時私の顔は、ものすごく不安そうな顔になっていたのかもしれない。私を見た野崎さんは、そのきれいな顔を困つたように崩すと、私の両手を手に取つて暖かく包んでくれた。そして泣いている子供を、あやすような口調で話しかけてきた。

「大丈夫。部長はああ見えて、結構優しい生き物だから」

包まれた両手から暖かいものが、流れ込んでくるような感じがした。野崎さんは、まるで優しいお姉さんのようだった。私にも、こんなお姉ちゃんがいたら良かったのに。

でも、生き物って、何？

白い廊下を野崎さんと歩いている。部長の部屋はこの先、廊下を突き当たって、エレベーターに乗って、一階に下りて、一階の渡り廊下から新館に行つて、そこからまた昇つて、最上階に着いたら廊下を歩いたところにある。

はつきり言つて、ものすごく遠い。なんでこんなに遠いんだろう。普通部長というからには、その部署に責任がある人なのだから、近くにいたほうがいいのではないかと思うのだけれど、なぜか意匠設計部の部長の部屋は隔離されているかのように遠かった。それとも、ほかの部署の部長も、みんなそんなのかな。

でも、なんだかこの遠い道のりが、私の緊張をさらに加速させているような気がする。ここまで部長に関することはほとんど聞いていない。しいて言えば、野崎さんが言っていた『結構優しい生き物』という言葉だけだ。まあ、それだって、きっと草食系だとか肉食系だとかそんなニュアンスのことだと思うので、たいして具体的なものとは思えない。だから、どんな人なのか分からないことが、私の緊張感をさらに煽っていたのだ。おかげで、すっかり喉がカラカラ

だった。

「田波さん、緊張している？」

半歩前を歩く野崎さんが、私を振り返りながら問いかけてきた。

「はぁ・・・」

乾いた唇が張り付いている。ちよつと口の中が気持ち悪い。ものすごくうがいしたい気分だった。

「もう、田波さんは真面目さんだなあ。部長なんて、ジャングル・クルーズに乗っている気分では会えばいいのよ」

なぜ、ここでジャングル・クルーズ？

「あのお、部長つて、どんな人なんですか？」

と聞いてみると、野崎さんは顎のところに人差し指を当てて、少し考えるような仕草を見せた。

ちよつどそのとき、私たちはエレベーター・ホールに着いた。すかさず、私が『下へ』のボタンを押す。ほどなくして安っぽい電子レンジのような音がして、静かに扉が開いた。私と野崎さんは滑り込むように中に入り、1と表示されているボタンを押す。私がエレベーターの操作パネルの前に立ち、野崎さんは私の斜め後ろに立つかたちになっていた。

エレベーターが静かに動き出す。エレベーターはちよつと古めの印象だった。中はそこそこ広く四畳半ちよつと狭くしたぐらいで、壁と天上には古めかしい木製の装飾がところどころ施されている。床はふつくらとした絨毯も敷いてあった。作りは粗雑ではないけれど、少し年期を感じさせるものだった。

私は扉の右側の表示板を見つめていた。エレベーターに乗ると、どういうわけか表示板を見てしまう。野崎さんもエレベーター・ホールに着いてから、口を開いていない。きっと私と同じように、表示板を見ているのだろうか。

するとほんの少ししてから、どういうわけか突然エレベーターが揺れたした。

なんだかダンツ、ダンツと物音もしている。明らかに挙動がおか

しい。

それと同時に、私は内臓を引つ張られるような恐怖を覚え始めた。とても、このエレベーターの仕様とは思えない。だって入社時に乗ったときは、こんな揺れはなかったもの。

二重三重の安全装置を設置してあると思うし、万が一にも落ちることはないと思うけど、やはり不安だった。宙吊り状態なのだという、ネガティブな不安しか思い浮かばなくなる。

正直に言つと、私は高所恐怖症なのだ。

怖い。何かに掴まらなくちゃ。

そんなことが意味のないことは分かっている。ボックスごと落下したら、この中でどんなに強く掴まっていようが、意味のないことだ。でも、掴まらなければ気が済まない心境に、私はなっていたのだ。

不思議と悲鳴は出なかった。でも、それは余裕があるからではない。恐怖を前に、声すら上げることができなかったのだ。

私はよろよると壁際に身を寄せる。

相変わらず、エレベーターは、ダンツダンツという音とともに揺れていた。今にも落下するんじゃないだろうかと思えるほどの振動。私は手すりに両手を伸ばす。腰が引け、自分でも情けない姿になっているのが分かる。そんな私の背後には、野崎さんがいるはずだった。

ふと、野崎さんは大丈夫なのかなと思った。これだけ揺れれば、高所恐怖症でない人でも十分怖いはずだ。私と同じように恐怖で震えているのか。人間、死の恐怖に直面すれば、どんなに冷静な人も冷静ではいられなくなると思う。

でも私には、野崎さんの理知的で綺麗な顔が、恐怖で歪むことをどうしても想像できなかった。やっぱり野崎さんのことだから、冷静にこの状況の推移を見守っているのだろうか。

手すりをギュッと縋るような思いで掴みながら、背中を壁に預ける。これで視線はエレベーターの中央に向くはずだ。そこには野崎



さんがいる。いま野崎さんは、どんな表情をしているのだろう。

振り向いた私の目に、野崎さんの姿が飛び込んでくる。

でもその野崎さんの姿は、私の想像のさらに斜め上を飛び越えていた。

「の、野崎さん！ な、な、何してるんですか！？」

「何って、ジャンプよ」

私の悲鳴に近い問いかけに答えた野崎さんは、ジャンプしていた。この狭いエレベーターの中で、マサイ族顔負けの華麗なジャンプをみせていたのだ。

「そ、そんなこと聞いてないです。なんでエレベーターで、ジャンプなんかしてるのか聞いているんです」

私は自然と声が大きくなっていった。

「それは、あれよ。このエレベーター古いじゃない？ だから揺らすと止まるかなあ、なんて思ったのよね。私一回、エレベーターが緊急停止して、閉じ込められるというシュチエーションを体験してみたかったのよ」

「そんなこと、今やらないでください」

「そう、たしかに今やらなくてもいいかもしれないわね」野崎さんは、ジャンプし続けながら考えこむような仕草をみせてから答えた。「でも、今なの。突然だけど、田波さん、エレベーターに閉じ込められたことある？」

「あるわけないじゃないですか！」

「だからなのよ。顧客にエレベーターが停止したらどうなるかと聞かれたとき、経験しているのと、経験していないのでは説得力が全然違うと思うわ」

「でも、でも、こんな新人研修する必要ないです」

「あら、だめよ。この業界って、若いとどうしても嘗められちゃうのよ。しかも女だと、その傾向に拍車をかけるの。でも、そこで武器になるのが、知識なのよ」

この時私は、本当に野崎さんは上田研にいたんだと思った。上

田教授は良く私たち生徒に、「知識は経験に基づかなければならない」と言っていたからだ。

でも、今やる必要はない。しかもこんなに揺れる古いエレベーターでやるのはどうなの。というか、

「お願いします。やめてください、野崎さん」

私は、もうあきらかに嬉しそうに跳ねている野崎さんに向かって、懇願した。

「いやよ」

即答だった。

この揺れるエレベーターにこれ以上いるのが限界だった。だって、このエレベーター古いし、どういう構造なっているか分からないけど、結構揺れるんだもん。

ワイヤーが切れてペしゃんこになる光景しか思い浮かばない。ひりひりとした恐怖が襲ってくる。本当に怖い。私は、すっかり足元が覚束なくなっていた。

野崎さんを早く止めなくては、と私は思った。でもとても立ってられ状態でなかった私は、柔らかな絨毯が敷いてある床に両手を付く。まるで野崎さんに向かって土下座をしている格好だった。我ながら、ものすごく情けない格好だと思う。それでも野崎さんにたどり着けさえすればと思い、這うようにして野崎さんに近づく。

手を伸ばし、その上運動を繰り返している野崎さんのほっそりとした脛脛に、私はこれでもかという力で飛びつきながら抱きしめた。「あああ、捕まっちゃった」

仰ぎ見ると、残念そうに縋りつく私を見下ろす野崎さんの姿があった。

とその時、エレベーターが一階に到着。安っぽい音とともに扉が開いた。

でも、そこには、うちの社員と思われるスーツを着た男性が二人立っていた。エレベーターに入ろうとした男性社員二人は、私たちの姿を見て一瞬で固まる。あんどりと口を開けて、あきらかに見ては

いけないものを見たような表情を浮かべていた。

あらためて、私は私の今の姿を確認する。

野崎さんの足元に縋りついて床に寝転んでいる状態になっている私は、尾崎紅葉の小説『金色夜叉』で、貫一に足蹴にされているお宮の姿、そのものだといってよかった。違うのは縋りついているのが男の人のごつい脚ではなく、ヒールを履いた野崎さんの華麗な足だということだけだった。

エレベーターの中に入っていていかどうか躊躇している彼らをしり目に、私はなるべく冷静を装いながら、すつくと立ち上がった。そして、たいして汚れていなかったけど、スカートを二、三回、ぽんぽんっと叩き、着崩れないか確認すると、これまでの私の人生の中で最高と思われる笑顔を彼らに向けた。

「お疲れ様です」

軽く会釈し、何事もなかったようにエレベーターを降りる。でも、その声色は、ハートマークが付くかのようなものだったのが自分でも分かった。こんな大人になんかなりたくなかったと、心の奥底に住まう幼い私が泣いている。

男性社員たちは、完全に訝しげな視線を私に向けながら、エレベーターへ乗り込んでいった。どう思われたのか、私は考えるだけでも穴に入りたい気分だった。というか、アースオーガーで掘削した穴に、場所打ちコンクリート柱ごと埋設してほしいぐらいだった。

「意外と止まらないものなのね。古いから簡単に止まると思ったのに」

エレベーター前で呆然となっている私の横に、いつの間にか隣に来ていた野崎さんは、ものすごく残念そうな顔をしている。

それにしても、怖いなこの人。さっきのはエレベーター停止するだけにとどまらず、命の危機すら感じるものだったに、野崎さんは飄々としている。幸い命を失わずに済んだけど、あんな姿をほかの人に見られた私は、人としてのプライドを確実に失っていた。

「もう一回乗ってみる？」

小首を傾げ、私にこれでもかという感じの笑顔を見せる野崎さん、何とも恐ろしいことを言ってきた。

「いいえ、結構です」

語気が強かったのが、自分でも分かった。

「それは、残念。まあ、いいわ。あれぐらいじゃ止まらないこと分かったし、ほかの方法を考える必要があるかもね」

と考える仕草をみせながらも、なんだか嬉しそうな野崎さんは次の計画を練っているのだろう。

やだな、この人とエレベーターに、いいえ、世の中の乗り物という乗り物に乗りたくはない。なんだろう、野崎さんって動くものを見ると、何か怪しいことを思いつきそうな気がしてなんらない。私はいつかこの人に殺されるのではないかという気がしてならなかった。

と思ったけど、考えてみれば、次に行く新館にも、新館というぐらだからエレベーターがあるはずだ。それに部長の部屋が何階にあるのかわからないけど、昇らなくてもいいようなところに部屋があるとは思えない。

またエレベーターに野崎さんと乗るかと思うと、絶望感が私を支配しだした。と同時に頭から血の気が引いていく。

「どうしたの、田波さん。顔が蒼いよ。何か、拾ったものを食べちゃった？ ダメだよ、拾ったもの食べちゃ」

野崎さんは労わるような視線を投げかけながら、さらりとひどいことを言ってきた。

「違います。私、そんな拾ったものなんて食べません」

「じゃ、腐ったもの食べたとか。ダメだよ、賞味期限は確認しないと」

「違います。野崎さん、ぜんぜん違います」

「ええっ、じゃ、朝、金魚飲んできて、いま吐き出そうとしているの？ 大変、バケツに水を入れてこなくちゃ」

「違う！ 私、人間ポンプみたいなことできませんから！」

思わず、私は叫んでしまった。

「ええっ、じゃ、何を食べたらそんなに青くなるの？」

野崎さんは不満そうに口を尖らす。いったい私をなんだと思っているのだろう。

「食べ物、関係ないですから。私は・・・」

高所恐怖症のこと言おうとして、私は躊躇する。こんな年にもな  
って高いところに怖いなどというのは、ちよつと恥ずかしい。

すると、野崎さんが心配そうに私の顔を覗き込んできているのが  
見えた。

「高いところが、怖いのか？」

私は目を見開いた。

「知っているんですか・・・」

「いや、知らないけど、エレベーターの中であれだけ怖がつてい  
れば、誰でもわかるでしょ」

「でもでも、最後まで揺らし続けましたよね」

「うん」といい笑顔で、野崎さんは返事する。「だって、田波さ  
んが怖がつている姿って、なんか可愛いんだもん」

この人、Sだ。DSだ。

新館でも同じようなことをされるかと思うと、目の前が真っ暗に  
なる。

「そんな心配そつな顔しなくても大丈夫よ。新館には人が乗れる  
エレベーターは無いから、安心して田波さん」

「本当ですか？」

「本当よ。二十階にある部長室まで階段で行くのよ」

「それなら、安心です」

と思わず笑いが漏れる。釣られるようにして、野崎さんも笑って  
いた。閑散としているエレベーター・ホールで、高笑いしている女  
子二人。

笑いあいながら、私は考えていた。

部長室って、二十階にあるんだ。そうか、二十階か。二十階、ね

え・・・???

二十階っ！

鉄製の階段を、一段一段昇っていた。

新館の階段室は多少薄暗いものの、さすが新館というだけあって全体的に真新しい光沢があり、心なしか塗料の匂いがしていた。鉄製の階段は、階高の半分ほどで折り返す典型的なもので、床に薄い緑色のウレタン塗装がしてあった。私にとって喜ばしかったのは、手すりとかの隙間に下層から高層へと吹き抜けところが無かったことだった。こういう下が完全に見えないようにしてあるのは、高所恐怖症の人間にとって、何よりも安心感がある。

でも、安心感と疲労感是完全に別物だ。実際はまだそんなに疲れしているわけでないけれど、今さっき見た階数の表示は四階だということ进行を思い浮かべると、本当うんざりしてくる。最上階は二十階。まだまだ、遠い道のりだ。もう、これは軽い登山と言っていると思う。中学生のころからこれと言って運動してこなかった私としては、まさに苦行と言っているいいレベルだった。

だけど、とふと思議に思うことがあった。

部長はこの階段を毎日昇っているのだろうか。野崎さんは、たしかこのビルには人が乗れるエレベーターはないと言っていた。資材や物品を搬入するためのエレベーターはあるのかもしれないけど、少なくとも人が安全に乗ることのできるものは、この新館にないということだと思う。

「あのお、」

と、私は先に行く野崎さんの背中に声をかけた。野崎さんは無言で振り返り、疑問形の表情を投げかけてきた。私はいったん呼吸を整えてから、先ほどの疑問をぶつける。

「部長って、毎日この階段を昇っているんですか？ 二十階まで、毎日」

野崎さんは不思議そうな顔で小首をひねる。一瞬私は、自分が変な

ことを言っているのではないかと不安になってしまった。

「たぶん、昇っていないんじゃないの」

今度は、私が首をひねる。エレベーターがなければ、階段も使っていない。ほかに昇降できるものって、なんなの。

エスカレーター？

ううん、そんなはずがない。エスカレーターなんて、一基一千万円以上する。それをこれだけ階層があり、決められた人しか使わない建物に使うなんて、費用対効果があまりにも悪すぎる。そんな設計がどう考えてもおかしいことは、私でも分かる話だ。

階段を折り返すときに私の釈然としない表情が見えたのか、野崎さんはいったん足を止めて、少し高い位置から私を覗き込むようにしてきた。

「部長は、ずっとこの二十階にいるのよ」

えええつ、どういうこと？

私は階段を駆け上がり、野崎さんの横に並ぶ。それを認めると、また足を動かし始めた。私もそれについていく。

「ずっと居るって、どういうことですか？ 家にも帰らないということですか？」

「そうよ。というか、家がここなんだけどね」

家がここということは、当たり前だけどここで生活しているということだよな。じゃ、家族もここにいてるってこと？ このビルはエレベーターが無いにしても、明らかにオフィスの造りだ。とても社宅として作られているとは思えない。それに本社屋とつながっている社宅なんて、聞いたこともない。

「部長って、ここに住んでいるんですか？」

「そうだよ」

素っ気ない野崎さんの返事。

「じゃ、じゃ、奥さんとかお子さんとかもここに住んでいるんですよね」

「部長、今は家族いないんじゃないかな」

野崎さんは視線を上に向けながら、思い出すように言った。

そうか。だから、会社に住むなんてことができるんだ。独り身なら身軽なはずだ。住める場所なら、どこでも住めるだろう。たしかに会社に住んでしまえば、煩わしい朝や夕の通勤ラッシュに巻き込まれずにすむ。でも私は、会社が自宅なんていうのは嫌だ。仕事とプライベートは、しっかり分けていたい。

それよりも気になったことがあった。いま野崎さんは、『今は家族がいない』と言った。離婚でもしたのかな。

「あ、でも、そろそろ梅雨になるから、新しい家族ができるかもしれないわね」

上に視線を上げながら、なんだか嬉しそうに野崎さんが言う。

うーん、それは再婚するということだろうか。それで新しい家族なのだろうか。でも梅雨が何か関係あるのかな。梅雨と言えば、だいたい六月ぐらいだね。六月と言えば、あつ、そうか。

「ジューン・ブライドですね。いま四月だから、ご結婚まであと二か月ですか。それじゃ、部長もいろいろお忙しいでしょうね」

すると、隣を歩く野崎さんは不思議そうな顔を見せてきた。

「忙しい、のかなあ・・・？」

なぜ疑問形？　と思っただけど、考えてみれば部長はそれなりの年齢なのだから、必ずしも結婚式を挙げるとは限らない。だのにジューン・ブライドなどと、ついすっかり自分の基準で話してしまった。ちよっぴり恥ずかしい。

「そうですね。再婚じゃ、式なんて挙げないですよね」

「再婚・・・？」

とまたもや、不思議そうな表情する野崎さん。私、また変なこと言っちゃっただろうか。

野崎さんは顎のところに右手の人差し指を当て、少し考えるような仕草を見せる。その間私たちは階段を上り続け、ちょうど踊り場のところに差し掛かった。そこでやっと野崎さんは口を開いた。

「ああいうのって、再婚っていうのかな。でも、去年とは違う女



の子だから、やっぱりあれも再婚というのかあ」

と自分の中で、納得する感じだ。

それにしても、なんだか意味深な発言だ。去年と違う女の子って、なんだろう。離婚したのが、去年ということかな。そして今年再婚するということ？ まあ、そんなことがないとは言えないけど、ずいぶん手の早い・・・、ゴホン、ゴホン、スピード結婚なんだな。それとも今度結婚する人とは、ずっと不倫関係だったのだろうか。

そっか、だからだ。野崎さんが先ほどから再婚という言葉に、なんとなく違和感があるような表情をしていたのは、部長の再婚相手が不倫相手だからなのだ。きっと相手は社内の人間で、部長とは半ば公然の仲だったのだろう。もう内縁の妻と言っていいぐらいの感じと言つてよく、中にはもう結婚していると思つていた人もいるかもしれない。だから結婚などと言われても、いまさらという感じなのだろう。

だとしたら、これ以上この話題を続けるのは、踏み込みすぎのような気がしてきた。新入社員ごときが、社内のしかも直属の上司の噂話を根掘り葉掘り聞くのは、なんだかあまり褒められたものとは思えない。

それは私だつて、こういった人の噂話が嫌いではない。学生時代は、よく友達同士で誰と誰が付き合っているだとか、実はあの先輩が二股をかけていたとか、そんな話を喜んでしていた。でも今日会ったばかりの人に、不倫の話を楽しそうにしてしまつては、節操なく下品な人間と思われちゃうかもしれない。

しばらく私たちは無言で階段を昇った。ペースはそれほど速くないので、息が上がることはなかったけど、たぶん明日は筋肉痛になることだけは確実に思われた。でも、つくづくヒールの低い履きやすいパンプスでよかったと思う。もしヒールの高いものを履いてきいたら、どんなことになっていたことか。たぶん明日は筋肉痛どころか、歩くこともできなかったと思う。脹脛に湿布を張り、布団の上でうつ伏せになって、うんうん唸っている自分の姿が目に見え

ぶようだった。

野崎さんかというと、こんな私とは違って、すすい足を進めているように思える。部長室への道のり慣れているのか、それともともと体力があるからなのか。足取りは軽い。このゆっくりとしたペースも、きつと私に合わせているのだろう。

先ほどはあんなことがあったけど、姿勢よくすらつとした姿はやつぱり見とれてしまう。

「野崎さんって、かっこいいですよね」

思わず、言葉が漏れてしまった。途端、自分で言った言葉で赤面してしまう。私は何を言い出しているのだろう。

言われた野崎さんは、少しびっくりしているような表情を見せていた。けどすぐに柔和に微笑を浮かべると、何を思ったか私の頭をいきなり撫でてきた。

「もう田波さんはかわいいな。私もこんな妹がほしかったなあ」

なんて言ってきた。私はますます赤面してしまった。

「野崎さんは、兄弟いないんですか？」

少し声が小さかったかな。でも野崎さんみたいに綺麗な人にこんなことを言われてしまうと、どうしても照れてしまって声を張ることができなかった。でもそんな不安も杞憂だったようだ。

「うん、いるよ。兄と弟。私、男兄弟に挟まれて育ったんだよね。だから小さいときは、女の姉妹が欲しかったんだよね」と野崎さんは、軽やかに言った。「で、田波さんは兄弟いるの？」

「あ、はい、弟が一人います」

「そっか、田波さんも男兄弟かあ。でも、なんか、以外だなあ。

田波さんって、一人っ子かと思っていた」

「あつ、よく言われます」

「やつぱり。田波さん、育ちが良さそうに見えるもの。私なんて男兄弟の間で育ったから、なんかがさつに育っちゃって、田波さんみたいに女の子っぽい子って、憧れるんだよね」

「そんなことないです！ 野崎さんはかっこよくて綺麗です」

「おつ、嬉しいこと言ってくれるじゃん」野崎さんは、はにかむように微笑む。でもすぐ後に、「だけどね」と続けてきた。「かっこいいなら、部長の方が、断然かっこいいと思うよ。私なんか、足下にも及ばないね」

と言った野崎さんは、私を見たけど、その視線は私を見ているようには見えなかった。何か憧れのを、思い出すかのような感じだった。しかも、その瞳は少し艶っぽい。

あれ、何だろう、これ。

「部長って、どんな方なんですか？」

私は改めて同じ質問を試してみた。さっきエレベーターではあんなことになってしまったので、途中で棚上げになってしまったが、やっぱりどうしても気になる。これから私が付く人が、どんな人なのか。

野崎さんは階段を一步一步上りながら、また少し考える仕草を見せた。でもすぐに、私のほうへと向き直るようにしてきた。

「強そうと言うか、強いかな」

強い？

「それは格闘技が何かをしているとか、そういうことですか？」

「ううん、格闘技はしてないと思うよ。じゃなくて、見るからに強そうなの。まっ、実際強いんだけどね。たぶん水牛サイズの動物なら、一発だと思うよ」

水牛を一発？ なんじゃ、それは。

熊を素手で倒した空手家の話はどうか聞いたことがあるけど、これも似たような話だろうか。もうこの時点で私の頭では、ボディビルダーみたいなマッチョな体つきの男の人しか思い浮かばなくなっていた。そういう筋肉美自体否定はしないけど、正直私は苦手だ。それをカッコいいという野崎さんは、そういう男の人がタイプなのだろうか。

「部長って、すごいんですね」

とりあえず、どう切り替えていいか分からなかったので、肯定

することにした。

「そだよ。それに結構速いんだよ」

速い?! なにが?

野崎さんは、はてなマークだらけの私を無視するようにして続ける。

「ここつていうときは、速く走ることができるんだよね」

ああ、そういうことか。でも、なんか話の流れに脈略が無いような気がする。

「そんなに速いんですか?」

「速いわね。百メートル9秒ぐらいで走れるからね」

「はやっ」

百メートル9秒ぐらいって、それってオリンピック選手並み、それもとップレベルの成績だよな。途端、私の中で固まりつつあったマッチョで筋肉質なイメージが脆くも崩れさった。部長って、いったい何者なの。

「でもね、何もしてないときは、口を開けてジツとしてることが多いんだよね。それがまた、ちよつと可愛かったりするのよね」

「はあ・・・」

私はますます分からなくなった。口を開けてジツとしているなんて、ただのバカみたいじゃないか。そこらのオジサンが口を開けてボーっとしていたら、私にはとてもじゃないけど可愛いなんて思うことはできない。率直に言つて、危ない人だと思う。

でも、なんだろう。可愛いと言つたその野崎さんの表情が、こころなしか恋する乙女の顔のような気がする。これって、ひよつとすると・・・。

「でもね、田波さん、部長の前で無防備に立つちゃだめよ。食べられちゃうから」

食べられるう?

それって誰でも手を付けちゃうということ。女の子を見ると、すぐ口説こうとするということかな。

でも私のことを心配するのは、お門違いだと思う。私なんて可愛くないし、スタイルだってよくない。だから男の人に口説かれたのなんて経験、一度だってないのだ。おそらく百戦錬磨と思われる部長が、そんな私に手を付けてくるとは思えない。

でも野崎さんは、なんでそんな釘を刺すようなことを言ってくるのかな。これってやつぱり……。

「私なんて、前にやられちゃって、大変だったんだから。でも、今になってはいい思い出だね」

そうか。やつぱり、そうなのだ。部長の再婚相手というのは、野崎さんなのだ。部長の話をする時の野崎さんが妙に艶っぽかったのも、お二人がそういう仲だからなのだ。きっと私が部長付きになるので、変なことにならないか心配なのだろう。私だって彼氏が、仕事とはいえほかの女の子と二人つきりになるとしたら、気が気じゃない。

「大丈夫ですよ、野崎さん。私、こう見えてもガード固い方ですから」

「ほんとにいい？　大丈夫かな。ちょっと心配だな」

野崎さん、本当に心配そうな顔をしている。でも、やきもちを妬く野崎さんって、こんな顔するんだ。こういつては失礼かもしれないけど、そんな素直な野崎さんの姿が、ちょっと可愛らしく見えた。りした。

「本当に大丈夫です。むしろ部長に悪い虫が付かないよう、私がしっかりと見張ってますから」

と私は野崎さんにガッツポーズを見せる。するとそれまで神妙な顔をしていた野崎さんが、ちよつと明るめの表情に戻るのが分かった。

「おつ、頼もしいなあ。さすが私の後輩」

「でも、いいなあ、結婚」

「結婚？」

野崎さんは頓狂な声を上げた。ちよつと予想外の反応だ。でも、

すぐに気を取り直すようにして微笑んできた。

「田波さん、結婚に憧れている子なんだ」

「変ですか？」

「ううん、そんなことないよ。らしいというか、なんというか。可愛いなあ、と思っちゃった」

「野崎さんはどうなんですか？」

「私？」野崎さんは、自分に振られると思っていなかったような声色で、自らを指さす。そして軽く笑ってから、「全然、まったくだよ。そんなキャラじゃないし、結婚願望ゼロだし。だいたい家庭に入って旦那と子供のためだけに生きるなんて生き方、絶対嫌だしね」

あれ？ 思ったよりさばさばしているような気がする。

「じゃ、野崎さんは、結婚したら共働きするんですか？」

まあこのご時世、むしろ共働きの方が普通かなと思う。それに野崎さんにしても、会社を辞めちゃうことで、それまでのキャリアを潰したくないだろうし。

でも、野崎さんは私の質問に、軽く小首を傾げていた。

「まあ、結婚するなら、共働きになるかな」

なんか、言い回し微妙な気がする。それとも野崎さんと部長のことって、あまり公にできないことなのだろうか。

やっぱり、略奪婚。

部長が離婚したのが去年で、結婚が今年のだというのだから、そうじゃないかなと思っていたけど、やっぱり部長が結婚していると前から野崎さんと付き合っていたのだ。

うーん、ということは、これってあまり突っ込んで聞いていい話じゃないのかもしれないかも。

「田波さんは、結婚したら会社やめようと思っているの？」

野崎さんは、私を覗き込むようにしていた。

私自身、あまりそういうこと考えたことがなかった。漠然と結婚へのあこがれはあったけど、実際その生活をどうするかというのは、

なんだか遠い未来のような気がしていたので、はつきりとした考えを持っていくわけではない。

「うーん、あまりそこは考えたことはなかったんですけど、今のところはやめるつもりは無いです」

せっかく憧れのあった仕事に付けたんだから、辞めるなんて選択肢、今はあまり考えたくない。それに結婚したから仕事を辞めるなんて、ちよつと違うような気がする。

「そう、よかった」と野崎さんは、安堵するかのような笑顔を見せる。その笑顔を見ながら、私つて必要にされているんだなと単純に思えた。人に必要にされているのつて、ちよつぴりうれしい。でも、何も経験のない新人に、どうしてそこまで言えるの？　ちよつと不思議に思える。

「ん？　どうした？」

私の顔が少し怪訝そうな感じになっていたのか、野崎さん不思議そうな表情を浮かべている。私は、慌てるようにして答えた。

「いえ、何でもないです。でも・・・」

私はいったん口を閉ざす。どう答えていいか。

「でも？」

先に行く野崎さんが、振り返りながら小首を傾ける。

「あ、はい。あの、なんでみなさん、私なんか、期待をかけてくださるのかなあつて、思つて」

考えながら話したので、なんとも纏まりのない言葉になってしまった。だけど野崎さんは、「はあん」と会得したような声を漏らすと、不思議そうになつていた顔が明るくなる。

「課長も言つていたけど、なんて言つたつて、田波さんはあの人事部長の肝いりだからね。それはみんな期待しちゃうと思うよ」

また人事部長だ。さつきからたびたび話題に上がっている人事部長つて、いったいどんな人なのだろうか。数ある入社希望の応募の中から、私なんてマニアックな選択する人事部長という人に、興味がないと言えばウソになる。

「私、会ったことないんですけど、その人事部長さんは、そんなにすごい方なんですか？」

私の問いは、自然と恐る恐るという風になる。

「すごいかどうかは分からないけど、人事部長、田波さんのこと大分お気に入りだったみたいよ。誰にも懐かないのに、田波さんの履歴書だけは、放さなかったらしいから」

懐かない？

また、微妙な言い回しだ。あまり人と親しくない人という意味なのかな。でも、人事部長だよ。人事部長がそんな人でいいのかな、この会社。

それでも人事部長が押してくれたお蔭で、私はこの会社に入れたわけだから、やっぱり一度お礼に伺った方がいいのかもしれない。

「あのー、人事部長って、お名前なんて言うんですか？」

「名前？」

またもや、野崎さんは不思議そうに首を傾げる。なんだか私の方が変なのかと思ってしまう。

「そう名前です。一度お礼にお伺いした方がいいかなと思ひまして名前ぐらい憶えてないと失礼じゃないですか」

野崎さんは「ああ」と納得するが、ただどすぐに、ちょっと気になることを零す。

「名前なんて、あつたかな」

えーと、どういうこと。名前が無い人なんているの。それとも、また違うニュアンスのことなのかな。野崎さんは人事部長の名前を覚えていないということ、かな？

「何か覚えていませんか？ 何か取っ掛かりみたいのあれば、ほかの人に聞くとときも訊きやすいですし」

野崎さんは、一所懸命何かを思い出そうとしているのか、眉間に皺を寄せ居ている。

「うーん、私、あれ系苦手なのよね」

苦手？ 苦手っていうことは、嫌いということかな。



でもさらに唸りながら、何かを頭からひねり出そうとしていた。

「たしか、アメリカ・・・なんだろう？」

アメリカ？ 人事部長、外人なの？

これだけ大きい会社になると、それは外国の人も働いているのかもしれない。だとすると野崎さんが名前を思い出せないことも、少しは頷ける。私も海外小説を翻訳した本を読むと、登場人物がみんなタカナ表記だから、ごっちゃになっちゃうことがあるもの。

「人事部長って、外国人なんですね。私、まだ見てないですけど、ウチの会社って、外国の人も結構いるんですか？」

「いないよ」

踊り場にぱんつと飛び乗りながら、頓狂な表情で振り返る野崎さん。元気だなあ。さすがに私は、ちよつと辛くなってきたのに・・・。

いやいやいや。そんなことじゃないよ

「ええっ、だって今、人事部長はアメリカの人って、言ったじゃないですか」

と言った私と野崎さんは、なんとなく見つめあう。なぜそんなにイノセントな目で私を見るのだろう。

しばらくして、野崎さんは思い出したように「ああ」と声を漏らす。

「まあ、あれも外人っていえば外人か」

何だか、含みがあるような言い方。それにしても人事部長を『あれ』呼ばわりとは、野崎さんはよほどその人のこと苦手なのだと思う。

なにかこれ以上野崎さんに、人事部長のことを聞くことが気が引けてきた。まあ、あとで誰かほかの人に尋ねればいいか。

「到着」

踊り場にすつと立って深呼吸するように両手を広げている野崎さんが、私の方を振り返っていた。野崎さんの背後には、『20』というプレートが白い鉄製の扉の前に付けられている。

「じゃ、さつそく部長に会おうか」

野崎さんの嬉々とした表情が、私に向けられていた。やっぱり部長、いや婚約者と会うのは嬉しいみたいだ。野崎さんのこんな表情を見ると、心が何だかほんわかとする。

でも……

「少し、休ませてください」

知らず知らず息が上がっていた私は、膝に両手を付く中腰の姿勢で野崎さんを仰ぎ見た。野崎さんのその顔は、上気しているように見える。まるで動物園を前にして、期待で胸を弾ませる子供のような感じ。でも私が休みたいといったものだから、多少ふくれっ面になっていた。「ええっ」と私を非難するような声を上げると、腕時計に視線を落としながら、

「じゃ、今三十五分だから、三十六分まで休憩ね」

「短っ」

「短くないよ。こう深呼吸して、吸って吐いてするだけだったら、一分で十分でしょ。ほら、さん、はいっ」

と言って野崎さんは胸を張って両手を広げるポーズをとり、私にも同じことをやれと差即してきた。仕方がないので、私も両手を広げながら、大きく息を吸い込む。

「全然、動悸は治まんないんですけど。申し訳ないんですけど、私の心臓をもっと労わってもらえないですか」

「ええっ」またもや野崎さんは、非難するような感じに言う。「じゃ、しょうがないから、あと三十秒あげる」

三十秒という数字をどうとるか。私的には、明らかに労り成分が足りないと思う。

「あの一、せめて十分ください」

「それは多いよ。学校じゃないんだから。私たちは、遊びでここに来たんじゃないんだからね」野崎さんは、ちよつと考える様子を見せてから、「じゃ、一分十五秒で」

「なんで、そんな中途半端なんですか」

もう完全に、からかわれていることは分かっていた。と同時に、一刻も早く部長に会いたいなんだという野崎さんの気持ちが、ひしひしと伝わってくる。部長のこと、本当に好きなんだ。私もそういう人が現れるんだろうか。

「もう、じゃ、五分でいいです。五分だけ、休ませてください。お願いします」

また、時間を縮められると思っていた私だったけど、野崎さんの反応は意外にもあつさりしているものだった。

「わかった。じゃ、五分ね」

「いいんですか？」

と問い返した瞬間、自分でもちよつと余計なことを言っただかなと思っただ。

「ん？ なにか？」

「いえ、あの、ちよつと・・・」

私はどう切り替えしていいか、一瞬迷ってしまった。『部長に早く会いたいなじゃないですか？』なんて聞くのは、ちよつとストリートすぎる。

そんな私の様子を見ていて察しがついたのか、野崎さんは二十階への真つ白い扉の前で、腰に手を当て仁王立ちのように立つと、笑顔を見せてきた。

「大丈夫よ。部長の部屋の鍵は外からちゃんと閉まっているから、そんなに急がなくても逃げ出したりしないから、安心して」

「そうですか、それなら安心です」

野崎さんにつられて、私も笑顔になっっているのが分かった。

そうか、そうか、そうなのだ。外から鍵が掛かっているのだ。それなら絶対逃げられないよね。しかも、ここは二十階だし・・・。

・・・？

どういうこと？

部長の部屋は、外から鍵が掛かっている。その衝撃的事実に、私

は頭がくらくらしていた。

だって、部長だよ。相手は意匠設計部の部長なんだよ。それが自由に出入りできないように、閉じ込められているなんて、そんな会社聞いたことがない。それは、私は社会人一年目だし、社会的通念などというものをまだまだ知らないヒヨッコかもしれないけど、会社で部長が閉じ込められていて、しかもそこで暮らしているなんていうことが、どんなに異常な状況なのかということぐらいは分かるつもりだ。

そもそもどんな事情で、外に出られないことになっているのか。何か問題あったことは間違いないと思うけれど、それがなんなのか、その理由を想像することも難しい。

だいたい野崎さんは、婚約者のこの状況をどう思っているんだろう。先ほどから見ていると、そんなに深刻そうには見えないけど、内心はいてもたってもいられないじゃないだろうか。だって婚約者だもの。将来を誓い合った仲の人なんだよ。そんな人が会社で閉じ込められているなんて、普通なら許容できるはずがない。それにこんな状況で、結婚などと言える状況ではないだろう。

あ、だからだ。

先ほど結婚の話になったとき、野崎さんは一瞬戸惑うような感じがあったのはこのことなのだ。結婚は六月であと二か月しかないのに、今部長は会社に監禁状態。結婚を前にして、という状況ではあまりにもいいものとは言えない。だから、大手を奮って結婚の話ができないのだろう。

でも野崎さんの今までの態度からは、悲壮感を微塵も感じることはできなかった。それとも私に、人の見る目がないからなのか。だけど、それでも、野崎さんの態度はあっけらかんとしすぎているような気がする。

「はい、ここが部長の部屋だよ。どう、田波さん、緊張する？  
それとも、楽しみ？」

野崎さんは、まるで子供のようにはいしゃいでいる。一瞬、ここがデ

イズニールランドのアトラクションの前にいるような錯覚さえ、私は覚えたぐらいだった。

でもここは、会社の廊下だ。無機質な白い壁に囲まれ、長く続く廊下の壁には銀色の扉が静謐に光を放っていた。床にはシックなグレーで統一されたタイルカーペットが、生活感のなさをさらに演出していた。

野崎さんは、さっそくとばかりに上着のポケットから鍵を取り出すと、銀色のドアノブに鍵を差し込んだ。カチリと軽い姻族音とともに、鍵が開く。

「開くよ、開けちゃうよ。いい？」

むやみにはしゃぐ野崎さんを傍目に、私は髪とか眼鏡とかスカートの裾とか正す。顎を引き、姿勢を伸ばして、準備を整えた。

「はい、大丈夫です」

緊張しているのが、胸の高鳴りで分かった。ただでさえ初対面の目上の人に会うことだけで緊張するというのに、今までの野崎さんの話を反芻してしまうと、さらに緊張してしまう。監禁状態の部長って、いったいどんな人なの。

野崎さんがドアレバーを回すと、かちつとラッチが外れる音がする。

「じゃ、開けるね」

いよいよ意匠設計部部长と対面だ。伸ばしていた背筋をさらに伸びる。扉がわずかに開き、隙間から光が差し込んできた。その光の筋が無機質な廊下を照らす。

だけど、どういうわけか、野崎さんはそこで手を止めて扉を閉めてしまった。

「なんで閉めるんですか？」

野崎さんは、「ん」といたずらっ子のような笑顔を見せる。

「田波さんが気合い入っているんで、なんか閉めたくなくなっちゃったんだよね」

などと言ってきた。

つくづく思う。この人は、絶対Sだ。

「まあ、それは冗談として」急に襟を正すようにしてまじめな態度になると、続けてきた。「さっき私が言ったこと覚えてる？」

さっき言ったこと？ 何だろう？ なんかいろいろ言われたんで、どれのことだかぱつとは思いつかない。

「何の話ですか？」

「部長の前に立ったら、気をつけてって言う話」

「ああ、その話ですか」

野崎さんは、余程部長が他の女の子に手を出すことが気にかかるらしい。今はあっけらかんな態度をとっているけど、私が部長と二人つきりなることが気になって仕方がないんだ。念には念を、というつもりだろう。

「大丈夫ですよ。私はこう見えてもガード堅いですから、安心してください」

だいたい私は、親子ほども年が離れている男の人に興味はないのだ。だから間違っても、野崎さんが心配するようなことが起こるわけがない。

「本当だよ。部長が前に居たら、全力で逃げてね」

ホント、野崎さんは心配性だ。見るからにびしつとしている人が、初めて彼氏ができた女子高生みたいなことを言うと、なんだか余計可愛らしく見えてしまう。それにしても、ちよつと大げさ過ぎのようない気がする。

「大丈夫です、大丈夫です。全力で逃げますから。それより、部長への挨拶、終わらせちゃいましょう。私になんかにかまっていると、野崎さんもお仕事大変になっちゃいますよ」

「絶対だよ。絶対逃げてね」

「だから、大丈夫ですって」

「逃げ方も、ちゃんと考えていてね」

「大丈夫です。ちゃんと考えてますから」

「結構速いからね。田波さんが、思っているよりも速いからね」

「ホント、大丈夫ですから。早く終わらせちゃいましょう」

私は笑顔を作りながらも、ちよつといらいらしてきているのが分かった。いい加減、ちよつとしつこいぐらいだ。一瞬、おじさんには興味が無いと、よつぽと言ってやろうかとも思った。

野崎さんは、再びドアレバーに手をかけた。そして私の状態を、もう一度確認するように一瞥してくる。

「右逃げるか、左に逃げるか頭に思い描いた？」

と、まるでPKの時のゴールキーパーの心構えのようなことを言ってきた。

わけ分らない。わけ分らないけど、いい加減とつと終わりにしたい私は、とりあえず頷くことにする。

「じゃ、開けるね」

私は息を飲み、頷く。

野崎さんの華奢な腕が、ゆつくりと華麗にスイングし、その手にある扉を部屋の内側に大きく押しやる。

扉が開き、午前の強い陽光が私の目に刺さってきた。逆光で部屋の中の様子は、分からなかった。

でも、こんなところでうだうだしても居ても仕方がない。私はすかさず一歩前進し、深々と頭を下げた。

「初めまして。今日からお世話になるます田波春子と申します。

よろしくおね、がっ」

「田波さん、危ないっ！」

そのとき何が起こったのか、私には分からなかった。

私の挨拶が終わる前に野崎さんの絶叫が聞こえると、どうやら野崎さんに押し倒されていたらしい。

先ほどの強い日差しでやられた私の目が、徐々に明順応する。まづ目の前にあったのは、襟元から覗かせる野崎さんの綺麗な胸元だった。野崎さんの首元から垂れてきていたネックレスが、鼻先を掠めて少しくすぐったい。

でも、何だろう、この匂い。どこかで嗅いだことがあるような匂い。たしか小さいころ家族と行った動物園の匂いに似ている。

「だから、逃げてって言ったでしょっ！」

野崎さんの叫びが聞こえる。その声色は、完全に怒っているようだった。

なんでこんなに怒っているのか分からない。私、何か怒られるようなことしたのかな。

「田波さんは、そこでじっとしていて。約束だよ。絶対動いちゃ駄目だからね」

言い終わると、野崎さんはすつくと立ち上がる。倒れている私を跨いで、仁王立ちになった。

野崎さんの声色には、あきらかに余裕がない。今までのおちゃらけていたものとは、ぜんぜん違っていた。

野崎さんは私の上に跨いだまま、ゆっくりと片方つつヒールを脱いでいく。

私は糸を張るような切迫感を感じた。

野崎さんの視線は、正面を向き何者かを捕えたまま話さない感じだった。

私はその視線の先に、何があるのか気になった。野崎さんが間合いを測るように、見据えるものはいったい何なのか。

だけど野崎さんの体に視線を遮られていて、その向こう様子がよく分からない。なんだか先ほどから動物園で嗅いだような、獣臭と何か動物臭がしてはいるんだけど。

私は首を動かし、野崎さんが見据えるその先を確認しようとした。まず見えたのは、なにやら堅く荒い岩肌のようなというか、甲羅のようなものだった。それがゆっくりと脈打つように上下しているのが分かる。非常に大きい。この部屋いっぱいはあるそうだ。そしてその甲羅のようなものに、一対のがつしりとした手足のようなものが一対あるのが見える。それは鱗と思われるもので覆われていて、広く大きく開かれていた。すぐにでも動けるように緊張感が漲って



いる。明らかに戦闘態勢だと思う。

さらにその物体は低いうめき声のような音が聞こえていた。それは、昔恐竜展に言ったとき聞いた肉食恐竜の威嚇する声に似ていると思った。地面を揺らし内蔵を捕まれるような恐ろしい音だ。

私は音が発する方へと、恐る恐る視線を向ける。

すると巨大なトラバサミのようなものが目に飛び込んできた。大きく開かれていて、今すぐにも獲物を噛み砕こうしている。それに挟まれたら、何人も逃れることができないだろうことが、私でも分かる。白い歯は鋭く、あれが肌に刺さったら、深く食い込み骨までが音を立てて砕けるだろう。そしてその大きく開かれているものは、完全に私たちの方へと向けられていた。そこから発する生臭い息が、私たちの方まで届いてくる。何とも身もすくむような臭い。つて、これつて、あれだよな！？　つか、あれしかないよね！

「の、野崎さん。これつて・・・」

「シッ、黙ってつて」

野崎さんは私の方は一切向かず、その恐ろしげで大きなものに向いたまま答える。

「でも、動物園にいるあれですよね」

「分からないの、田波さん。黙ってなさい。死にたいの」

「でも、でも、これ・・・」私は、恐ろしげにこちらを向くそれを見ながら、いったん息を飲む。そして、

「・・・ワニですよね」

そうワニだ。しかも体長五メートルはあろうかという、巨大なワニだ。先ほどからこちらに向けて大きくあけられている口は、私なんて一口で食べられるぐらい大きい。

もう死の恐怖しか思い浮かばない。先ほどのエレベーターの出来事なんて比べ物にならないほどの恐怖。こんなこと言うのも恥ずかしいし、ものすごく情けないのだけれど、心なしかちょっとちびつたような気がする。

社会人なのに、大人なのに・・・。もう、いい大人なのにっ！

その時、突然、その強大なワニが目にも止まらぬ速さで動き出した。それを認めると野崎さんは、瞬間的に腰を落としてから、両足で床を蹴るようにして飛び跳ねる。

太い丸太ぐらいのものが、私の目の前をものすごいスピードで流れ、野崎さん目がけて飛んでいく。

野崎さんは上手く壁を利用し、急角度で方向転換。追いつがるワニをやり過ごす。タイトなスカートが太もものきわどいラインまで捲りあげ、均整のとれたその足の大部分を覗かせながら、華麗に飛び回る。

ワニはじれったそうに頭を振りながら、野崎さんをその大きな口で再三に渡って捕えようとしていた。しかし野崎さんの動きが素早く、なかなか捕らえることができない。ワニの背後へ背後へ回り込もうとしている野崎さんを追って、ワニはこの部屋の中でぐるぐる回る。

ワニの大きさは、あきらかにこの部屋では狭いようだ。野崎さんを追うためその巨体を捻るが、四方を囲む壁に阻まれ、うまく野崎さんを捕えることができない。イライラするようにして大きな口を閉じたり開いたりしていた。そして肝が冷えるような声を漏らしている。野崎さん捕えることができないのが、なんとも歯がゆい感じ。しかし捕食者の王と言われるワニもバ力ではない。その巨体と太いしっぽを利用し、野崎さんを徐々に部屋の角へと追い詰めていく。逃げ場を失った野崎さんは、部屋の角に後ずさる。さすがの野崎さんも、額から一筋の汗が伝っていた。

どうしよう、野崎さんが食べられちゃう。

と言っても、今の私にはどうすることもできそうもない。だってすっかり腰が抜けていて、足がぜんぜん言うことを聞かないんだもの。じりじりと間合いを詰めていたワニは、鎌首をもたげるように口をゆっくりと大きく開く。

角を背にした野崎さんに逃げ場はなかった。野崎さんは覚悟を決めたように手を堅く握ると、立ち向かうように腰をゆっくり落とす。

この後の光景を思い浮かぶと、とても見ていられなかった。でも、どういうわけか視線を逸らせない。私はこの現実離れた光景を前にして、完全に恐怖で固まっていた。

そのときワニの大きく開かれた口が、野崎さん目がけて振り下ろされる。

と同時に、野崎さんはその大きく開けた口を間一髪飛び越えた。

野崎さんは、ワニの頭部に飛び乗っていた。食べそこなったワニの口は、空振りのまま閉じられる。

すかさず野崎さんは方向転換しながら、ワニに馬乗りになると、そのままワニの頭部を抱えるように抱きつく。ワニは口を開けようとがくがく、野崎さんに抑えられているため開けることができない。ワニの口が閉じられると、野崎さんは上着のポケットからビニール紐を取り出す。上体でワニの口を押えながら、その口が開かないように、手際よくぐるぐると巻いていく。それでもワニは逃れようと、巨体をうねらせていた。

「部長、暴れないでください」

と野崎さんが、刺すような口調で一喝。

部長？ 今このワニに向かって言ったよね。ひょっとして、このワニが部長？

いやいやいや、まてまて。冷静に考えるの、春子。常識的に考えてそんなわけないじゃない。

そう、きつと私の勘違いだ。ワニに向かって言っているような気がしたけど、この部屋のどこか声が聞こえる範囲に部長が居るに決まっている。『暴れないでください』という言葉の意味だって、部長に言ったわけではなく、何か言葉を省略しているのだと思う。あれだけハードな立ち回りをしているわけだから、冷静そうに見える野崎さんも興奮していたのだろう。だから、なんだか意味不明な言葉になってしまったのだ。

そうだ、そうに決まっている。

ほどなくして部長と呼ばれたワニは大人しくなっていた。野崎さ

んはというと、スカートが捲りあげた状態で、ワニの頭に馬乗りになったままだった。

ワニは野崎さんを乗せたまま、のしのしと腹をすりながら方向転換しだした。だけどその動きは緩慢で、さっきまでの殺気は感じられなかった。野崎さんにマウント摂られ、すっかりあきらめが付いたかのようにだった。

ほどなくして、ちょうどワニの口が床に尻餅をついている状態の私の方へと向けられた。ワニと真っ正面から向かえ合わせになる。

私は頬から嫌な汗が流れ、思わず生唾を飲み込む。

大人しくなっているとはいえ、またいつ何時暴れ出すか分からない。本当に身がすくむとは、このことだ。正直生きた心地がしない。それに今はビニールでぐるぐる巻かれて閉じられているけど、また襲いかかってこない保証はないのだ。あんな細いビニール紐ごときじゃ、とてもこのワニの馬鹿力を抑えきれるとは思えない。だってこのビニール紐、普通の荷造り用のものだもの。

「田波さん、大丈夫？　びっくりしちゃった？　だけど、もう大丈夫、安心して。ワニって、噛む力は強いけど、開く力はそれほどでもないから」

ワニの頭に依然馬乗りになったままの野崎さんが、私に声を掛けてきた。切羽詰まった感はずっかり消え去り、柔和な調子になっている。

でも私は、野崎さんのその言葉を素直に信用できなかった。私の方に向けられるその凶暴そうなワニを見ると、とてもそうは思えないのだ。

すっかり落ち着き払っている野崎さんは、愛でるような視線をワニに向けていた。あまつさえその華奢な手で愛おしげにワニの頭を撫でてさえいる。ペットの猫や犬を、よしよしと可愛がる感じ似ていた。

野崎さんはワニの頭を撫でながら、優しげに微笑む。どうしてそんな表情ができるのか私には理解できない。今日の前に横たわるワ

二は、とても愛玩動物には見えない。下手したら食べられたかもしれないこのワニに、菩薩のように微笑む野崎さんの精神力は驚きだった。

でも野崎さんは、さらに驚くべきことを私に言ってきたのだ。

「紹介するね、これが意匠設計部の部長のイリエワニさん。学名はCrocodylus porosusっていうみたいね。こっちが正式な名前になるのかな」

！？

一瞬私は意識が宇宙に飛びそうになった。

「どうしたの？ 鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔して」部長であると言われたワニの上から、私をのぞき込むようにしている野崎さん。「あつ、分かった。部長のこと結構かわいいと思っているんですよ。うんうん、わかるよー。なんかこんな風にでんつとしている感じ、ちよつとかわいいよねー」

なんだかものすごく楽しそうに「部長、田波さんかわいいって」と野崎さんは言いながら、ワニの頭をばんばんとたたき出した。

それを見ていた私は、ただただ首を横に振ることしかできなかった。頭が混乱して、何から話していいか分からない。というより、もう何もかもが信じられない心境だった。

ワニが部長って、どういうことなの？

意味が分からない。全く分からない。

えっ、なに、これが社会では普通なの？

だいたい部長って言うことは、このワニ、仕事しているということだよな。

人の言葉分かるの？

いやいやいや、言葉が分かったら、いきなり襲いかかることなんてあるわけがない。そうだよ、このワニ、というかこいつ、いきなり私たちを食べようとしたんだよ。私たち、ペロりと、朝食にされるところだったんだよ。それなのに野崎さん、かわいいって、なに、どうということ？ わからない、何もかもが分からない・・・。

っーか、こんなのあり得ないっ！

っーか、野崎さんそいつをそれ以上たたくの止めてっ！ また暴れ出すから。私たちに襲いかかってくるからっ！

お願いだから、もうそれ以上刺激するの止めてっ！

などと思っていたけど、ただ首を横に振るしかできていなかった私の姿を見ていた野崎さんは、訝しげな表情になっていた。

「んっ、かわいくないの？」

私は全力で首を縦に振る。野崎さんは不機嫌そうに口を尖らせる。

「えええっ、どうして？　かわいいじゃん」野崎さんは労るようにワニの頭を撫でる。「部長、ごめんねー。田波さん、かわいくないだって」

なんて、避難するように言ってきた。

えええっ、なんでちよつと私が悪い感じになっているの？

「野崎さんは、それ、というか、そのワニ、ホントにかわいいと思っているんですか？」

やっと、声を出すことができた私だったけど、声が裏返っているのが自分でも分かった。

「あたりまえじゃない」野崎さんはワニの上で胸を張りながら即答する。「私、こういうは虫類系大好きなのよね。特にワニはいいのよね。このプテってした感じ、たまんないの。もう、なんでこんなにかわいいかなー」

と言って、またワニの頭をたたき出す。

ああ、そういうことか。だから野崎さんは部長の話をする時に、少しうつとりするような感じになっていたんだ。そうか、そうか。

そうか、じゃねー！

「あわわわわわ、野崎さん、たたくの止めてください。お願いだから、やめてっ」

私の声は悲鳴近かった。もう生きた心地がしない。

「もう、心配性だなー、田波さんは。だけど、そんな田波さんもメキシコ・サラマンダーみたいでかわいいだけどねー」

「メキシコ・サラマンダーって、なんなんですかー？」

「えっ、知らないの？」

「知りませんよ、そんな未知の生物っ」

「別に未知の生物でもないんだけどね」野崎さんは顎に手を当て、ちよつと考えるようなポーズをとる。「あ、そうか。メキシコ・サラマンダーって、あまり一般的じゃないだね。田波さん、ウーパールーパーって知っている？」

私の頭の中で、白くてウネつとしたものが思い浮かぶ。

「それなら、知っています・・・」といいつつも、なんか釈然としない。「って、まさかつ・・・」

「うん、田波さんを初めて見たときから、なんとなくウーパールーパーに似ていると思っていたんだよね」

野崎さんはワニの上で俯せたまま、私をのぞき込んで満面の笑み。

「うっ・・・」

ウーパールーパー・・・？ 私がつ！

また、頭がくらくらしだした。ウーパールーパー似ているなんて、そんなこと言われたのは生まれて初めてだ。ひよつとしたら私って、世界で初めてウーパールーパーに似ていると言われた女かもしれない。

うーん、そんな一つだけの花、いらない・・・。

「まあ、田波さんも、いつまでも怖がつてないで、早く部長に慣れなくちゃだめだよ。明日から、田波さんが部長のお世話をしなくちゃならないんだから」

忘れていた。そうだ。私、部長付きを申し渡されていたんだ。

ここに来るまで部長付きというのは、部長の秘書のような仕事をするんだなと漠然と思っていたけど、それはあくまで部長が人間だという前提の話だ。まあ、上司が人間かどうかの前提条件が必要な時点で、あきらかにどうかしているわけだけど、それは置いておいて、部長がワニだった以上、私が思い描いていた秘書的な仕事ではありえない。ワニと会議しても意味がないだろうし、まさか顧客に

合わせるわけにもいかないだろうし。

だいたいこんな凶暴なものの人前に出したら、目の前の人、それこそ上司だろうが、顧客だろうが食っちゃまうかもしれない。実際、いま私たちは食われかかっていたわけだから、会議や打ち合わせが終わったら、このワニ以外いなくなっていたなんて事態、十分にあり得るわけだ。だからスケジュール調整なんて言う仕事は、最初からあるはずがない。

それに当たり前なのだけれど、部長はワニなのだから、人間の言葉は理解できないし、話せない。だから資料をまとめたりとか、部長からの方針や伝達事項をまとめて関係各所に連絡するなんて言う仕事もあるわけがない。

なんだか目の前が真っ暗になっていく。

なぜなら私に託された仕事がいっただいどういうものか、おのずと決まってくるわけだから……。

「あのー、私の部長付きって、ひよっとして……」

野崎さんは、「ん？」とどうしたの、という表情を見せながら答えてくれた。

「部長のお世話をすることだよ」

「お世話って……」

「うーん、餌をあげたりとか、部屋の掃除をしたりとか、体調管理をしたりとか。あつ、そうだ。こんど近くの動物園から繁殖させる話が来ているから、その立会いにも行かなくちゃならないかもね」

ああ、やつぱり。でも、それって、飼育員じゃん。動物園の飼育員の仕事じゃん。

いやいやいやと、私は全力で首を横に振る。

「無理です、絶対無理です」私はすぐ目の前にあるワニの鼻っ柱を見やる。固い鱗に覆われたそれは、太古の恐竜を思わせる。とてもじゃないけど、こんなの世話できるわけがない。

「私、食べれちゃいます。きつと、部長に食べられちゃいますか



「ああ」

「あれ、さつき『私、ガードが堅いですから』って、言っただけだった？」

「それとこれとは、意味が全然違います」

「えっ、じゃさつき、どういふつもりで言っていたの？」

「うっ、それは・・・」

言い返そうと思ってた私は、あれやこれや変なことが思い浮かんで、言いよどんでしまった。

「それは？」

野崎さんは、心なしかほくそ笑むように聞いてきた。

「うっうっ・・・」

「なあに、はつきり言わないと分からないよ」

面白そうなオモチャを見つけた子供のような視線をぶつけてくる野崎さん。この人の性格からして、私が言うまで許してくれそうもない。

だから、もう、完全に羞恥プレイになることがわかりきっているのに、私は言うしかないのだ。というかこれを言わなければ、私はいつでも解放されない。

「たとえば、ホテルに行ったりとか・・・、なんか、変なことされたりとか・・・、ちょっと、エッチなこと、されたりとか・・・、そういうことに対するガードというか、なんというか、そういうことです」

とがんばって言うてみたものの、どんどん小声になって、しどろもどろになってしまった。

ああ、何言っているんだ、私。

そんな状態になってしまった私を、野崎さんはものすごく楽しそうに見ている

自分の顔が、カーツと熱くなってくるのがわかる。できれば、こんな私を見ないでほしい。っていうか、見ないで。

でも野崎さんはしどろもどろになっている私の様子に、一応満足

したようだ。「ふっ」という笑みを零して見下していた。

うつつ、間違いない。やっぱり、この人DSだ。

「ま、そんなに心配しなくても、慣れれば大丈夫よ。餌さえちゃんとあげていれば、めったに襲いかかってくることはないから、安心なさいって」

跳ね起きるようにして、胸を張りながら野崎さんが言う。

安心？ いやいやいや。

「でも、でも、さっき、襲いかかってきたじゃないですか。あれ、あきらかに食べようとしてましたよね。捕食しようとしてましたよね」

「あれは初めての人がいたから、なんか興奮しちゃったのよ。ワ二つて、こう見えても結構、繊細な生き物なんだよ」ねー、などと言いながら野崎さんは、部長の頭をまた撫で始める。「それにあれかもよ、田波さんのこと気に入ったから、いいとこ見せようとしたのかもしれないよ」

違う。あれは気に入ったとか、いいとこ見せようとか、そんなレベルのものではなかった。部長であるワ二の私を見る目は完全に捕食者の目だったし、そのおかげで祖先が恐竜から逃げ回っていた時のDNAレベルで刻まれている記憶を呼び覚まされたぐらいだった。それでも百歩譲って、部長が私を気に入ってあんな行動をとったというなら、それは同じ『気に入った』でも、おいしそうだという『気に入った』だ。

「あ、思い出した」

相変わらずリアルワ二から降りようとしないう野崎女王様、じゃなかった野崎さんが、なにやらランプが付いたような表情していた。

うーん、変なこと考えてなければいいけど・・・。

「何を・・・思い出したんですか？」

私は恐る恐る聞いてみる。

「うん、さっきの人事部長のアメリカ何とかの話」

あつ、その話か。

でもなんだろう。部長がワニだったという事実を突きつけられてしまうと、もう嫌な予感しかない。

「アメリカの人なんですよね？」

できればそうであってほしいとの願いを込めて尋ねてみた。せめて私を気に入って採用してくれたものが、人間であってほしい。でも野崎さんから帰ってきた言葉は、普通はこんなこと願わなくてもいい私のささやか望みを、あっさりと打ち砕くものだった。

「まあ、アメリカから来たのは来たんだけどね」

また意味深な表現。

はあ・・・もう、なんとなく分かっていた。どうせ人事部長も人間じゃないんだ。なんだか知らないけど、きっとこの会社はそういうルールになっているんだ。

どうせアメリカだから白頭鷲とか言ったりするんだろう。あ、それともバツファローかな。そう言えば、アメリカにもワニは居たはずだよ。まさか、またワニなんてことないよね。だけど爬虫類系を大好きにな野崎さんが苦手だと言ったんだから、やっぱりワニはないか。

まあ、いいや。どうせ、どっちみち人間じゃないんだ。

受け入れる、春子。受け入れちゃえば、楽になる。もうこのさえだから、鳥だろうが獣だろうがトカゲだろうがワニだろうが、なんでも来いだ。

うん、心の準備はできた。

「じゃ、人事部長はアメリカから来たなんていう動物なんですか？」

葛藤の末に導き出した私の問いに、野崎さんが慢心の笑顔で答えてくれた。

よし、バッチコイ。

「うん、アメリカザリガニだよ」

・・・？

ザリガニかあ。よりによってアメリカザリガニかあ。

そいつは全く考えてなかった。っていうか、思いもよらなかった。どうやら私は、赤くて、殻に覆われていて、裏返すとちよつとグロテスクで、決して綺麗とは言えない用水路なんかに生息していて、それでいて男子小学生に大人気の、あのアメリカザリガニに採用されたい。

・・・。

はあ・・・。

さすがに凹んだ。自分がアメリカザリガニに採用されたのかと思ったら、かなりヘビーに凹んだ。

私は力なく床に手を付くと、自然とわき起こった乾いた笑いをを止められなかった。

「へへへ・・・へへ・・・」

力のない自分の声が無機質な部屋反響している。

この凹みは、ちよつとやそこらは簡単に克服することができそうもない。

だってどう考えても、私の今までの努力、関係ないもの。

「どうしたの？ 田波さん。急に笑い出して。人事部長が、アメリカザリガニだったことがそんなに嬉しかったの？」

もう、笑いしか返せない。

と思っただけど、ううん、ちよつと涙が出てきた。

何か考えなければと思うけれども、もう何から考えていいかすら思いつかない。私は床に頭を付くんじやないかというほど項垂れる。だけど野崎さんは、そんな私の姿を頷いたと受け取ったらしい。楽しそうにこんなことを言ってきた。

「そっか、田波さんはザリガニが好きだったのかあ」

ああ、もう、どうでもいいや。

だけど野崎さんは、そんな私を無視して楽しそうに続ける。

「そっか、そか。ホントに嬉しいだね。よかったね、アメリカザリガニに気に入ってもらえて」

ええ、嬉しいです、嬉しいですとも。死ぬほどにね。

っていうか、ホントに死にたい。

ああ、田舎のお母さん。せっかく大学まで出してくれたんだけど、私がんばって勉強もしたんだけど、そんなの関係なかったみたい。だって私、アメリカザリガニに採用されて、上司はワニなんだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3244y/>

---

職場多様性

2011年11月7日20時04分発行